

# 一冊の約束

亀原 慶貴

うちの高校の図書館は、  
いつも一冊欠けている。

扉を開けて、カウンターを過ぎ、階段を上る。上りきったら右へ曲がり、そのまま直進。  
奥から三列目の通路で曲がって、三つ目の棚。上から四段目の一番左。

「やっぱり……ない」

「ここの本だけ、いつも無いのだ。」

高校へ入学して最初のオリエンテーションで、流れるように図書委員にされてしまった。しかし、それが結果的にこの一冊分のスペースを見つけないままになった。

初めて気づいたのは、返却された本を棚に戻す作業中。それから、いつもそこだけ空いていることに気付いた。

しかも、それは一年経っても埋まることはなかった。新学期が始まる前、図書館の大整理を行った時も、リストに載っている本は全てあり、全て棚に戻ったのにもかかわらず、ここだけ、不自然に一冊分のスペースが残っていた。

二年に進級してからは、図書委員会には入らなかった。でも、図書館へ通うのは続けていた。本のこともあったが、今はそれよりも気になっていることがあった。

図書館に入って左手に、壁一面がガラス張りにされた読書スペースがある。そこにたたくむ一人の少女。彼女のことを気になっていた。

彼女は、一番奥の窓に近い椅子に座っている。あそこが彼女の特等席なのだ。いつも必ず、あそこに座っている。……俺が無理やり図書委員にされた、あの日からずっとだ。

肩までかかり、黒く艶のある髪。視線を落とす、物静かに本を読むさまは、儂さのある大和撫子を連想させる。そんな彼女の読んでいる本は、小説をはじめ、雑誌やビジネス書、絵本や百科事典まで多種多様なものだった。

毎日同じ席で、まったく統一性のない本を読んでいる……しかも少し可愛い彼女のことを、俺はいつからか気にかけていた。

……とはいっても、俺はいまだに彼女に声の一つもかけられずにいた。なんていうか、その……話しかけることに抵抗があった。

相手が異性だということもあるが、彼女の可愛さゆえなのか、彼女の座る席の周りだけどこか別の世界のように感じて、近寄りたさがあった。

しかし、いつまでもそんなことを言っている訳にもいかず、毎日少しずつ、一席ずつ近づいて行って、ついに今日、彼女の前の席にまで達したのだった。

遠目からなら可愛く見える、なんてことはよくあるが、近くに来てみても、やはり少女は可愛かった。

整った顔立ちに、艶のある髪……

「あっ……」

少女の容姿に見とれていた俺は、ちょうど顔を上げた少女と目が合ってしまった。  
やばい。

俺は本も開かずに、彼女のことを見つめてしまっていた。もしかして、気味悪がられたんじゃ……？

唾を飲み込んで、彼女の反応を待った。……しかし、彼女は一瞬驚いた顔をしたものの、寂しそうな顔をして、また、本に目を落とした。

え？ どういうことだ？

反応に困った俺は、ただその場に座っていることしかできなかった。

あれから一時間近くが過ぎた。相変わらず俺は、彼女の前の席に座ったままで、彼女もまた、席を変えずに本を読んでいた。ガラスの向こうからは夕日の光が差し込んでいて、一日が終わりに近いことを感じさせた。

……このままじゃダメだ。せつかく目の前に来たというのに、目が合ったくらいで怖気づくなんて。とにかく、何か話を振ってみよう……

「あの……」

ピタッ

ページをめくりかけていた彼女の手が止まった。

「……何か用？」

本に目を落としたまま。そう返された。自分で声をかけたのに、言葉が続かない。

「用がないなら、あまりこつち見ないでくれる？」

声音に怒気はこもっていない。むしろ、かすれていてか弱ささえ感じた。

とにかく何か話題を振らないと。でも、何か話題にできるようなことは……

一つだけ、心当たりがあった。

「あ、あの！ この図書館、いつも一冊だけ本棚に戻らない本？ があるみたいんだけど……知ってる？」

その言葉を聞いた瞬間、めくりかけていたページが彼女の手から離れた。めつくとというよりは、力が抜けて滑り落ちたかのように。

「……何で知ってるの？」

彼女はいまだに、本に目を落としたままだ。

「去年、図書委員をやってて、それで気づいたんだ」

「図書委員をやったから分かったって……ずいぶん熱心にやってたのね」

「いや、本当はやりたくなかったんだけど。その場に流されてつい受けちゃったっていうか……」  
お？ いいぞ。いい感じに話が続いてる。

「へえ。嫌々なのに熱心にやるなんて、そんなにいい人アピールしたかったの？」  
なぜだか煽るように言ってくる。

「いい人アピールなんかじゃないよ。片づけてたら、たまたま気づいただけだし」

「じゃあ、なんでそんなにその本のことを気にしているのよ。ほっといたっていいじゃない！」  
彼女の言葉には怒気ももっていた。何か触れてはいけないことに触れたのか？

「いや、もし紛失してたとしたら、他の人がもうその本を読めなくなっちゃうだろ？ 多分並び

的に後咲遥って人の小説だと思っただ。あの作者、文章力ないし非現実的すぎる所もあるけど……ちよっと気に入ってるんだよね」

嘘は言っていない。一冊分のスペースから三冊が後咲遥って人の小説だった。上段は辞典類が並んでいるから、絶対の自信はないが、多分後咲遥の小説が入るのだと思う。

「じゃあ！ もしそれが本当に後咲遥の作品だったとしたら、それを見つけてあなたはどのようなことをするのよ！」

彼女の言葉には、怒気がこもっていた。ここで初めて、彼女は顔を上げた。頬はうつすらと赤くなっていて、涙が流れたかのような跡がある。泣いていたのか？

「見つけたら？ ……それはまあ、最初に俺が読もうかな」

「えっ……」

気の抜けた返事が返ってきた。

その後、彼女はいったん本に目を落とし、数句したのちに、

「……知ってるよ。その本のこと」

彼女はそう言った。

「えっ本当？」

「……うん」

少しためらいがちに。

「でも、タダじゃ教えられないかな」

「え？ じゃあどうすれば？」

「私と約束をして、それを成し遂げられたら教えてあげるよ」

「約束？ いったい何を……」

言いかけて俺は、言葉に詰まった。なぜなら、彼女の可愛らしい顔が目の前にあったからだ。

それも、鼻と鼻が触れてしまいそうなほど近くに。

「私はいつもここに居るから、君も毎日ここに来て。それで、私の話し相手になって」

「話し相手？」

「そう。期限は……そうね、三週間がいいかな」

「三週間、毎日話し相手？」

「そう」

悪くない話だ。本の真相？ が知れる上に、彼女と三週間話せるんだ。むしろ願ったり叶ったりだ。

「どう？ 約束してくれる？」

彼女の瞳に見つめられて。

「ああ、約束するよ」

俺は返事を返していた。

その言葉を聞いた瞬間、彼女の顔は眩しいほどの笑顔になった。

可愛い……と、そうだ。まだ名前を聞いてないや。

「そういえば、君の名……」

「そろそろ図書館を閉めるので、帰る準備をお願いしますー」

言いかけたところで、館内アナウンスが流れてきた、振り返り背後の時計に目をやると、もう

少しで六時を回るところだった。

「もう閉館の時間か。それじゃあ、とりあえず名前だけでも……」

振り返ったが、そこに彼女の姿はなく、さつきまで彼女の座っていた椅子が、ただただ夕日に照らされていた。

次の日の放課後、俺は図書館に行くために靴を履きかえていた。俺の通う私立秀陽学園の図書館は、他の学校のものとは異なっていた。そもそも、まず図書『室』ではなく、『館』で、校舎から離れたところに図書館単体として建っている。学園長の意向らしく、多くの本を保管する為に別館にしたのだという。

二階建てで、大きさは体育館より一回りも大きい。県内随一の広さと蔵書数を誇っており、普段から一般開放もされている。

そんなわけあって、本好きにとってはたまらないスポットとなっていたが、図書委員をやっていた俺にとってはこの広々とした図書館は地獄に近いところであった。

しかし、今はそうは思っていない。むしろ天国だと思っている。だって……

「あ、誠。今日は遅かったのね」

図書館に入って左手の読書スペース。窓際のいつもの特等席に座る少女——晴香とのひと時が待っているからだ。

約束をしたあの日から、すでに一週間近くが経っていた。初めは、自分に不釣り合いなほど可愛い晴香に緊張していたが、笑顔で楽しそうに話してくれる晴香を見ているうちに、そんなものはどこかへ行ってしまっていた。

俺が放課後図書館に着いた時には、いつも晴香は特等席に座って本を読んでいた。俺が来たことに気付くと本を閉じて、今みたいに色々なことを話してくれる。話し相手といっても、俺がほとんど聞いているばかりなんだけど……

「ちよつと！　ちゃんと聞いてたよ！」

「あ……ごめん。聞いてなかった」

「もー！　ちゃんと聞いててよね」

ぶくーつと頬をふくらす晴香。可愛い。

最初こそ、大和撫子のような優雅な少女をイメージしていたのだが、実際中身は年相応で、可愛らしさ満点の少女だった。

そんな美少女と話しているのが羨ましいのか、最近は周りの生徒たちがこちらをちらちら見て、ひそひそと話しているのをよく目にするようになった。正直、優越感に浸っていた。

「ねえ！　また聞いてないんじゃないの？」

晴香がずいっと顔を近づけてきた。思わずドキッとしてしまう。

「あ……ああ悪い。また聞いてなかった」

「もう！　あんまり話聞いてくれないと、約束守ったことにならないからね？」

そうだ。晴香とこうして話しているのも、この約束があったからだ。

初めは、晴香についていろいろ質問した。何でいつもここにいるのか？　どうしてあの本のことを知っているのか？　しかし、何においても「内緒だよ」の一点張りで分からなかった。唯一

分かった事といえば、彼女の名前が『晴香』だということだけだ。

でも、それでも十分だった。名前しか知らなくなつて、今こうして目の前で話している。それだけで何もできなかったあの日々からすれば、十分な成果なのだ。

できれば、三週間が過ぎても、約束とか関係なしに話せてたらいいな―なんて、最近考えてたりもする。

とにかく、先の話は後にして、今はこの瞬間を楽しもう……

「もう！ もう！ もう！ また聞いてなかったでしょ！」

「うわっ」

ドサツ

耳元で叫ばれたその言葉に、椅子ごとひっくりかえってしまった。もちろん周りからは注目目的である。

「ふふふ、私の話を聞いてなかった罰が下つたみたいね」

視線の先で、晴香が満足そうに笑っている。

「あの……大丈夫ですか？」

近くの席に座っていた、いかにもザ・文学少年の男子生徒が、近寄ってきて声をかけてくれた。

「ああ、大丈夫。ありがとう」

彼の手を借りて起きる。

「いきなりひっくり返りなんかして、どうしたんですか？」

文学少年は心配そうに俺を見つめてくる。

「いや、そこの彼女に耳元で叫ばれてさ」

「えっ？ 彼女？ 誰のことを言ってるんですか？」

「えっ？」

誰って、俺の視線の先にいるじゃないか。

「気になっていたのですが、なんでいつも独り言を話されてるんですか？」

「は？ 独り言？」

文学少年の言っていることがわからない。

それじゃあまるで、晴香がいないみたいじゃないか。今だって、俺の目の先にいるんだぞ。「ちょっと君、本の読み過ぎで目が悪くなってるんじゃない……」

言いかけて気付く。あれだけの叫び声や物音を立てたのにもかかわらずに、周囲の視線は俺のみに集まっていることに。

俺の視線の先で、晴香は苦笑いをうかべていた。

ひと騒動あつてから少しして。

俺は理事長室の前に立っていた。あの時、ちょうど図書館に居合わせていた理事長に、「あとで理事長室に来てくれますか？」と声を掛けられた。何の用事で呼ばれたのか、見当がつかない。状況的に考えれば図書館でうるさくしていたことだろうけど、そのくらいでわざわざ理事長室に呼び出すか……？

ガチャ

理事長室のドアが開いて、中から六十代くらいの女性が出てきた。優しげな表情と雰囲気は、

どことなくおばあちゃんのような安心感を漂わせているが、この人が、私立秀陽学園の理事長兼校長をしている柗陽子さんだ。

「織部誠くん、だよね？」

「はい、そうです」

声音からも優しさがにじみ出ている。

「どうぞ、中に入って」

招かれるがままに、俺は理事長室のドアをくぐった。

部屋の中は、よく学園ドラマなんかで見る理事長室と、何ら変わらなかった。てつきり壁には本棚が並んでいるものだと思っていたのだが、さすがにそこまではなっていないかった。

「そこに座って」

棚からカップを出しながら、理事長が言った。俺は指定されたソファへ腰かけた。

「いきなり呼び出してごめんなさいね。ちよつと織部くんと話したいことがあって」

目の前のテーブルに二人分のカップを置いて、理事長は向かいのソファへ腰かけた。カップにはオレンジ……多分、紅茶が入っていた。

「えっと……何の話でしょうか？」

空気に耐えられず、思わず聞いてしまった。「図書館でうるさくしちゃったことですか？」

あれは……えっと、理由がありまして……」

「その原因についてもしかして。噂の妄想相手の方？」

「いや……妄想相手じゃなくて。いたじゃないですか。俺の隣に、女の子が」

「あら？ 女の子なんていなかったわよ？」

「は？ 何を言ってるんだこの人は。」

「肩までかかる髪で、顔の整った可愛い子がいましたよね？」

「いいや、いなかったわよ？」

この人も目が悪いのか？

「じゃあ、俺の隣にいたその少女は、存在しないっていうんですか？」

「ええ、存在しないわ」

「なっ……！！ だったら……」

「少なくとも、織部くん。私達には認識できていないと思うわ。晴香のことは」

俺の言葉をさげぎって理事長から出た言葉は、意外なものだった。

「え？ ……私達？ ていうか、どうして名前を……」

「ああ、やっぱり織部くんの話している相手は晴香なのね……」

理事長は懐かしげな顔をして、彼女……晴香について語り始めた。

理事長室のドアを閉めて、俺は図書館へ向かっていた。

あの後、理事長からは信じられない話を聞かされた。

晴香……本名、前崎晴香は、四十年近く前に、ここで死んだ少女らしい。彼女は生まれてすぐに両親とも他界してしまい、叔母と二人で、この学校が建つ前、ここに建っていた一軒家で暮らしていた。生活は厳しく、彼女は学校が終わり次第すぐに家に帰り、家の手伝いをしていたのだ

という。同年代の友達のように遊べなかった彼女は、いつしか絵本や小説のような現実とは別の違う世界にそこを抱いていたのだという。理事長は、晴香と同年であり、幼馴染であったそう。晴香の生活をかわいそうに思っていた子供の頃の理事長は、晴香に多くの本をプレゼントしていたのだという。本に力をもらった晴香は、お世辞にも幸せと言えないような毎日を一生懸命生き、高校生になってからのある日。本を書くことを決意したのだという。晴香の夢を応援していた理事長は、親のコネで晴香の書いた文を、本にしていたのだという。

しかし、そんなある日。彼女の家は火災になり、そこで晴香は命を落としたのだという。

警察の調べによると、火災は誰かによって故意に起こされたもので、結局犯人は捕まらなかったのだという。近隣の住民によると、晴香は何度も燃える家の中へ入っては出てを繰り返し、そのたびに、黒く焦げた紙のようなものを持っていったという。

そして最後。彼女が入った直後に家が崩れ、彼女は瓦礫の下敷きとなった。

この話を聞いた時、怒りと悲しみが混じったような何とも言い難い焦燥感に襲われた。

理事長は数年後に、そこに学校を建てたのだという。晴香の家は、今の図書館のあたりだったそう。

理事長は晴香の遺品の一つを、図書館に置いていたらしい。しかし、数年前に行方不明になり、現在も見つかっていないようだった。

そんなこともあって、図書館で独り言を言っている変な少年がいるという噂を耳にして、今日図書館へ来たら、案の定俺が騒いでいたというわけらしい。

考えているうちに、図書館の前まで来ていた。すでに六時を回り、扉は閉まっていたが、理事長に渡された鍵を使って開けた。

図書館に入って左手。読書スペースの窓際のいつもの席に、彼女はいた。

今は本を読んでいない。机に突っ伏している。

一步。また一步とその席へ近づいていく。

他の人からは晴香は見えない……。だが、理由は分からないが、俺には見える、話せるのだ。だったら、やることは一つしかないだろう。

彼女の隣へ来た。彼女は突っ伏したままだ。

「晴香……」

「……何で戻ってきたの？」

声が震えている。

「理事長から全部聞いたんだ。晴香の昔のことも、もう、晴香は死んでいることも」

「だったら！　なんで今ここにいるのよ！　普通だったら、気味悪がってここに来ないんじゃないの？」

「気味悪がるなんてしないよ」

「分かったんでしょ？　私と話してた誠は、周りから見たら独り言言ってる変な人になってたっ  
て」

「ああ」

「そんな状況にまでされといて！ 生きてもない私のところへ何で戻ってくるのよ！」  
でも言いに来たっていうのよ！」

「違う」

「じゃあ、なんだっていうのよ！ 普通……」

「普通じゃない」

「えっ」

俺の言葉に、彼女は顔を上げた。頬には涙の跡が残っていて、赤くなっている。

「他のやつには、晴香が見えない。だけど俺には晴香が見える。ほら、それだけで十分普通じゃないだろ？」

晴香の動きが止まった。

「俺はお前を気味悪がったりしない。俺ならお前と話してやれる」

彼女の瞳には、光るものがあつた。

「それに、約束は三週間だろ？」

「っ……！」

彼女は、泣き始めた。

ひとり、誰にも知られずに過ごしていた日々の分まで溢れているかのように。

「……眠い」

朝のホームルーム直後、俺は思わずつぶやいた。

あの夜から何日かして、俺はアルバイトを始めていた。なぜかというと、俺はあることに気が付いたからだ。

彼女は見た目十七歳。つまりは死んだときそのまま。俺も今十七歳だから、男女の違いはあれど、じつは彼女にも俺と同じで青春したい気持ちがあるんじゃないかと考えたわけだ。

しかし、晴香のことだ。ほとんど外には出ずに、毎日ああして本を読んでいたのだろう。

本には日常も非日常もあるし、雑誌なんかには洋服とか食べ物の記事がたくさん載っているだろう。ましてやここは、県内随一の蔵書数を誇る大型図書館だ。知ろうと思えばほとんどのことを知れるに違いない。

ただ、死んでしまっている晴香だからこそなのだが、俺はそれで満足してはいけないと思うのだ。本を見ればたいいていのことは知った気になれるだろうが、それは、外国旅行の本を読んで外国へ行った気であるのなら変わらず、その場の雰囲気や感覚といったものは何一つわからないのだ。

もしそうなら、そうだとしたら。俺は晴香に色々なことを体験させるべきなんじゃないかと。そう考えたのだ。

しかしながら、たくさんを体験させるにはお金がかかることもある。だが、俺は学生で、それほどお金を持っていない。だから、俺は晴香に色々な体験をさせるために、あの夜の次の日から書店の棚卸やコンビニ、工事現場までたくさんバイトをしていた。

正直、つらい。だけど、これは俺にしかできないことだし、それに、できれば三週間の最後の日に間に合わせたかったのだ。

「はあ……。それにしても少し飛ばしすぎたかな……」



「なーにため息ついてんのよ！」

「おわっ」

いきなり耳元で話しかけられて、思わずそんな声を出してしまった。

そこにいたのは……。

「晴香！ 何でここに？」

「何でって、誠最近あまり長く図書館にいないでしょ？ だから、私からこっち来ちゃった」

晴香ははにかみながらそう言った。しかし、どこかふらついているような感じがする。

「大丈夫か？ なんか少しふらついているけど」

「え？ そんなことないよ。へいきへいき！」

そう言って彼女はびよんびよん跳ねてみせた。

「大丈夫ならいいんだけど……。あ、そうだ。晴香。今度の週末に、駅前に出かけないか？」

「駅前？」

「そう。晴香のことだから、ずっと図書館にこもってたんだろ？」

「……うん。一回も出たことないよ」

「一回も…… だったら、いつそう行った方がいいじゃんか！ どう？ 俺、そのために最近バイトしてたんだよ」

晴香が驚いた顔でこっちを見る。

「えっ、バイト？ じゃあ最近早く帰ってたのは……」

「黙ってて悪かったな。でも、晴香のこと驚かせたくて」

晴香の顔がぱあっと明るくなった。そんなに喜んでくれたのか。

ただ、その後。一瞬暗い顔をしたのを、俺は見逃さなかった。もしかして、断られるんじゃない……

…

「……うん。いいよ。今度の週末、一緒に出掛けよう！」

晴香から返ってきたのは、了承の答えだった。

よかった。断られなかった。

「それじゃあ、私はまた図書館に戻るね。誠これから授業でしょ？」

「ああ」

「それじゃあ、勉強、頑張ってるね」

そう言い残して、彼女は教室から去って行った。彼女の後姿は、やはりどこかふらついている気がした。

日曜日。休日だが、俺は図書館の中へ入って行った。左手、窓際のいつもの特等席で、晴香はいつものように本を読んでいた。これから、彼女と駅前へ出かけるのだ。

「おはよう、晴香」

「あ、おはよう！ 誠」

満面の笑みで返されて、俺も思わず微笑み返していた。

「それじゃあ行こうか」

「うん」

こうして、彼女との楽しい時間が始まった。

……始まるはずだった。

俺の計画では、まず始めに、駅前の有名ブランドの服屋で洋服を買う予定だった。なぜなら、彼女はいつも秀陽学園の制服しか着ていなかったからだ。彼女曰く、なぜこの制服なのかは謎らしい。

しかし、店の前まで来て気付いた。店の入り口には『本日休業日』と書かれた紙が貼られていたのだ。

「きゅ……休業日」

「あれれ？ 休業日だってよ？ ちゃんと調べたのかな？」

哑然とする俺とはよそに、彼女は楽しそうに笑っていた。

「ごめん、ちゃんと調べておけば……」

「大丈夫だよ。……あ、あそこのお店なんかいいんじゃない？」

近くを見まわして彼女が指差したのは、ブランド店とは真逆の、小さな洋服屋だった。

「あそこでいいのか？」

「いいのいいの！ ほら、行こ！」

彼女に言われるがまま、俺たちはその店に入って行った。

十分くらい後、俺と晴香は店を出ていた。晴香は制服ではなく、白のワンピースを着ている。この店で買ったものだ。

彼女によると、彼女が触っている本なんかは、他の人の目からは見えなくなっているらしくかった。それと同じ理由で、このワンピースも周りからは見えていないのだろう。

周りの人から見れば、いきなりワンピースが消えなかりしたら、俺が盗んだみたいに見えるかもしれないので、会計を済ませてから晴香に着てもらった。

正直、女物のワンピースを男の俺が買うのは恥ずかしかったが、彼女が喜んでくれてるみたいだったから、まあいいか。

その後も、俺のプランに沿って駅前散策をしたわけなんだけど……。行く先行く先で不幸なことが起こった。大きな雑貨屋に行けば、閉店セールでほとんど物はないし、高級料理店へ行けば売り切れということで店を閉められてしまった。しかし晴香は、そのたびにただ笑って、個人で経営しているよう雑貨屋や、フードコートでいいよと言って、俺をカバーしてくれていた。

そんな気を使いながらも楽しんでくれていた彼女だったが、俺の目でもわかる程に、だんだんと体調が悪そうになっていた。たまに「大丈夫？」と声をかけたが、そのたびに「へーきへーき」と彼女は返していた。

しかし。彼女は本当は大丈夫じゃなかったのだろう。気付いた時には、隣に彼女の姿はなく、少し後ろの路上に倒れていた。

「おいっ！ 晴香！ どうしたんだ！」

彼女のもとへ急いで駆け寄る。

「えへ……大丈夫だよ」

「全然大丈夫じゃないだろ！ 倒れてるじゃないか！」

言って彼女を抱き起そうとした。しかし、そこで俺は気付いた。

「えっ……。なんで……」

いくら彼女を抱きかかえようとしても、俺の手は彼女をすり抜けて、彼女に触れることができなかった。

「っ……！ くそっ」

思い出した。当たり前のように話していたから忘れていたが、彼女は死んでいるのだ。触れられないのなんてよく考えたら当たり前なのだ。

「なんでっ！　なんでなんだよっ！」

目の前で晴香が倒れてる。なのに……こんなに手の届く距離なのに、なんで俺には何もすることができないんだ！

「誠……」

晴香のかすれた声がする。

見ると、晴香はふらつきながらも立ち上がっていた。

「ほら、大丈夫……だよ。早く、次のお店に……行こうよ……」

どう見たって、晴香にはもう余裕はなさそうだ。

「店はまた今度連れてきてやるから！　だから……とにかく今は帰ろう！」

「大丈夫……すぐよくなるから」

「ならないだろ！　晴香……それ、図書館から離れてるのが原因なんだろう？」

「あれ……気づいてたんだ……。ばれてないかと……思ってたのに」

「気づかないわけないだろ！」

図書館では、いつだって元気だった。しかし、俺の教室へ来たとき……つまり、秀陽学園の図書館をはなれた時に限って、彼女は辛そうにしていたのだ。今この状況で核心がいった。

「帰れば調子が戻るかもしれないだろ？　だから帰ろう！」

「今日帰っても……また来てくれる？」

「ああ、約束する！　必ずまた来よう！」

「……分かった。それじゃあ……」

言いかけて、彼女はまた倒れてしまった。

「えへへ……まいったな。歩くのもできなさそう……」

「っ！　そんな……」

俺がおんぶでもできればいいのに。彼女に触れることさえできない……！　いったいどうすればいいんだ！

「誰か……誰か晴香を助けてくれっ！」

思わず叫んだ。周りの人々が不審そうにこちらを見ている。分かっている。彼女が見えるのは俺だけなんだ。誰も助けてなんかくれないんだ……

「織部君！　どうしたの？」

そう言っつて、人ごみの中から一人の女性が現れた。六十代くらいの、優しい顔……今は困惑の表情を浮かべているが、彼女は間違いなく、俺の通う秀陽学園の理事長——柊陽子だった。

「理事長っ」

思わず掴みかかっていた。

「晴香を……晴香を助けてください！」

「織部くん！ 落ち着いて！ 今何が起きてるのか説明して！」

「晴香が……晴香がここに倒れてるんです！ 図書館から離れたことが原因らしくて、図書館に帰ろうにも晴香は歩けないし、俺じゃ手を触れることもできないんです！」

「晴香がそこにいるのね。分かったわ！ 今ここに車を持つてくるわ！ 晴香に乗るくらい頑張りなさいって伝えておいて！」

そう言っつて理事長は、走って人ごみの中に消えて行った。

それからものの数秒後、エンジンの音とともに、理事長の車が現れ、晴香が何とか車に乗って、車は図書館へと走り出した。

あと少しで秀陽学園に着くというのに、晴香の状態は悪化する一方だった。

「どうして……」

「えっ……うそ……」

俺の言葉をさえぎった理事長の言葉に前方を見た俺は、信じられないものを見た。秀陽学園の東側——図書館のある方が赤く光っていて、黒い煙が上がっていた。

「あれってまさか……」

「火事！」

俺は自分の目を疑った、しかし、それは現実だった。図書館の前に止まった車のフロントには、赤く燃える図書館が映っていた。

「晴香の体調が戻らないのは、これが原因なのか……？」

炎はすでに、図書館全体にまで及んでいた。

「今、消防に連絡を入れたわ！」

理事長が言った。

「とにかく私たちは一旦安全なところに……」

理事長が言いかけた時。一つの影が、図書館へと向かってかけていた。

「えっ……晴香！」

そう、それは晴香だった。

ふらふらとしながらも、懸命に図書館へ向かって走っている。

「おい！ 戻ってこい！ ふらふらじゃないか！」

返事はない。

「お前じゃ何もできないって……」

「うん、できないよ！」

言いかけたところで、振り向いた晴香に言葉をさえぎられた。その顔には、涙が浮かんでいる。

「できないって分かっている！ だけど！ このまま見てるだけじゃ、あの日と変わらないじゃないかい！」

あの日……そうか。晴香は今この状況とあの日——晴香の死んだ日の光景が重なっているのか。だったら……

「私はまたこんな運命になるなんてやだ！ 誠が止めたって、私は一人で……」

最後まで言わせなかった。俺は晴香の目の前まで歩み寄って、触れられないはずの頭に手を乗せて。

「何言ってるんだ。今は、晴香一人じゃなくて、俺もいるだろ？」

満面の笑みで笑って見せた。

「ま……誠……」

晴香の瞳からは涙があふれていた。

「ほらっ、泣いてないで行くぞ！ 運命を変えたいんだろ？」

我ながら、なんてくさいセリフを言ってるんだろ？」

だけど、晴香は

「うんっ！ 行こう！」

満面の笑みでそう返してくれた。

そして、俺と晴香は、燃える図書館の中へと駆けだした。

「はい、織部誠君。今日でやけどの治療は終わりね」

「はい。ありがとうございます」

そう言ってる俺は、病院の診察室を後にしていた。

あの日のあのこと、俺は何も覚えていない。気付いた時には病院のベッドの上だった。理事長によると、あの後すぐに消防車が来て火を消してくれたらしい。俺は正面入り口から左手のスペースに倒れていたらしいが、奇跡的に軽いやけどで済んでいたのだという。

火災の原因は、文学に極度な嫌気がさしていたという、高齢男性による放火だったらしい。この男性は数十年前、同じ場所に建っていた民家にも放火をしていたことが分かり、今は警察の取り調べ中だという。

目を覚ましてから図書館には一度足を運んだ。建物はひどく焼けていたものの、なんと本類は一冊を除いて他は全部無事だったのだという。図書館は火災から本を守るよう設計されていたらしいが、それでもこの結果となったのは奇跡としか言いようがないと言っていた。

晴香の姿は、どこにもなかった。晴香の特等席は跡形もなく燃えてしまっていた。その代り、一冊の本が残されていた。

唯一燃えてしまった本。著者、後咲遥。題名もなければ中も何も書かれていない、焦げてしまった一冊の本。ただ、最後のページにだけ、こんな文が書かれていた。

もっと違うかたちで、会いたかった。新しい約束、いつか守ってね。

「いつか守って……か」

病院を出た俺は、思わず口にしていた。

眩しいくらいの青空を見上げる……と、

「退院おめでとうございます」

数名の看護師に父と母らしき人、それに退院した人だろうか。車い座った同い年くらいの少女がい向こうの出入り口付近で退院を祝っているようだった。

「生まれてから一度も目を覚まさなかったから、本当にどうしようかと一時期は思っていました

……」

母親らしき人が言っていた。

「さて、俺も家に帰るかな」

そう言って一歩踏み出した時だった。カバンの中から、一枚の紙が風で飛ばされた。

「おっと」

それは、あの本の最後のページだった。焼け焦げたせいでもろくなってしまっていたのか……飛ばされたページは、車いすの少女の足元へ落ちた。それに気づいた少女は、そのページを拾って。こつちを振り向いて笑って見せた。

「はじめまして。誠くん」